

令和 4 年 4 月 30 日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 202180184

氏 名 楠田 悠貴

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

- 派遣先: 都市名 パ リ (国名 フランス共和国)
- 研究課題名 (和文) : フランス革命期・ナポレオン体制期における17世紀イングランド史の表象
- 派遣期間: 令和 3 年 11 月 10 日 ~ 令和 4 年 1 月 21 日 (73日間)
令和 4 年 2 月 12 日 ~ 令和 4 年 4 月 9 日 (57日間) 合計 130 日間
- 受入機関名・部局名: フランス社会科学高等研究院 (EHESS) ・日仏財団 (FFJ)
- 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

報告者の研究課題は、フランスの図書館・文書館において網羅的な史料読解を行うことで、17 世紀イングランドの歴史がフランスでどのように受容され、フランス革命とナポレオンの時代の歴史的展開にどのような機能を果たしたのかを解明することであった。

報告者は、新型コロナウイルス感染症の世界的流行で長らく史料調査を実施できず、2021 年夏のワクチン接種後、念願の渡仏となったのであるが、フランス到着後まもなくワクチンの効果が従来よりも効かないとされる新株（オミクロン株）が登場し、フランスでは連日約 50 万人もの新規感染者が確認され、1 月半ばから 2 月半ばにかけて一時帰国せざるを得なかった。

このような制約を受けたこともあり、当初の計画よりもかなり短期間の滞在となったが、史料収集の面で大きな進展があった。まだ完全な史料読解は終わっていないが、1660 年のイングランド王政復古や 1688 年の名誉革命への言及をかなり収集でき、現在ピューリタン革命への言及との比較を進めている。またナポレオン・ボナパルトとオリヴァー・クロムウェルおよびジョージ・マンクとの比較言説を多く収集でき、ナポレオン自身のイングランド史認識についても大きなテーマとして浮かび上がってきた。

6 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

報告者は「フランス革命期・ナポレオン統治期に 17 世紀イギリス革命史を読む・書く」と題する学位論文を準備しており、今回の調査結果はその一部となる。収集した史料の読解を進め、2023 年度中には博士論文を完成させたいと考えている。

すでにフランス滞在中の 2021 年 12 月 4 日に、オンライン開催されたフランス革命研究会例会にて、「フランス革命期にイギリス革命史を読む」と題して、最新の調査成果をふまえながら、これまでの研究成果をまとめて報告した。今後も史料読解を進めていく必要があるが、この例会において日本の革命史研究者からいただいた多数の有益なコメントを参考にしながら、投稿論文を準備していくつもりでいる。具体的には、ナポレオン統治期に 17 世紀イングランド史がどのように認識されていたのか、またナポレオン・ボナパルト自身が 17 世紀イングランド史をどのように認識していたのか、そしてこうした認識がフランスの歴史的展開にどのような影響を及ぼしたのかについて整理したいと考えている。さらに、まだ具体的な研究会・学会は決めていないが、史料読解が完成した際には積極的に報告を行っていく予定である。

7 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本プログラムで得られた主要な成果は、＜1＞日本からアクセスできない一次史料を多く入手できたこと、＜2＞日仏学術交流のネットワーク基盤を築くことができたことの 2 点である。

＜1＞フランス革命は、長きにわたってナショナリスティックな意識のもとで研究されてきた事象であり、それゆえイギリス革命がフランス革命に及ぼした影響という研究課題には、先行研究がほとんど存在しない。したがって、報告者は研究文献に依拠することができず、フランスに一定期間滞在して一次史料を大量に収集しながら、イングランド史への直接的言及をかき集めて議論を組み立てるという手法を取らざるを得ない。この理由から、今回の渡仏で日本からアクセスのできない史料を多く入手できたことは、非常に重要である。とりわけ、報告者は新型コロナウイルス感染症の流行が始まって以降、本腰を入れた史料調査を実施できていなかったものであり、今回の渡仏は大変貴重な機会となった。

＜2＞報告者は将来、日本語のみではなく、フランス語や英語で研究成果を公表し、国際コロクに参加したり、共同研究に参画したり、世界中の研究者と対話的に活動していきたいと考えている。こうした研究者を目指す上で、日仏学術交流を推進する目的で設立された日仏財団の方々と知り合えたことは、今回の滞在の最も大きな収穫であったと言える。将来さまざまな企画に参画するためのネットワークが築けたと考えており、今後も良好な関係を維持していきたい。ただ、報告者がフランスに滞在した時期はかつてないほどの感染者数を記録したパンデミックの最盛期であり、日仏財団主催のイベントなどはほとんど開催されなかった。この点はとても残念であった。

最後に、この場をお借りして、受入研究者のセバスティアン・ルシュヴァリエ教授、リサーチ・コーディネーターの伊東由紀子さんをはじめとする日仏財団の皆様、複数回の計画変更にも親身に対応して下さった日本学術振興会の担当者の皆様に心からお礼を申し上げたい。